兵庫県現代詩協会　会報４８号

２０２０年１２月１日　発行：時里二郎

ふれあいの祭典
「詩のフェスタひょうご２０２０」
好評のうちに終わる

第一部講演会　講師　和合亮一氏

十月三日、新型コロナの影響で開催が危ぶまれたもののラッセホールにて「予定通り実施できたのは嬉しいことで一重に皆さまのご助力あってのことと感謝です。」と会長時里二郎の挨拶が始まる。限定数八十名の参加者を得てコロナ対策も万全を期しマスク着用・検温・消毒を行い席のジスタンスも計り異例の措置で開幕できた。

第一部の講演は講師の和合亮一氏の来神叶わず、スクリーンで福島から同時配信の形で行ったが直に対面しているような臨場感が得られて好評だった。手元の資料に従って話が進み、表情も声も明瞭で分かり易く熱のこもった語りにみな引き込まれ熱心に聞き入って良い時間が流れた。司会は大橋愛由等で質疑応答も活発に行われ、演題の「ＱＱＱ～震災十年へ絶対的質問を巡って」に刺激を受けた。

第二部　自作詩朗読会

第二部は自作詩朗読会でアイウエオ順に十五名の朗読が順調に進み、特に九十一歳の方の朗読に会場が沸いた。司会は大西隆志で進められ、閉会挨拶は副会長神田さよで締めくくった。予定通り十三時三十分～十六時三十分に無事終了した。

＊自作詩朗読者
李沙英・一色真理・イチゴミルク・小田涼子・高木朝雄
岸本嘉名男・為平澪・中尾彰秀・西海ゆう子・野口幸雄
濱本律子・福田知子・藤井雅人・山本真弓

＊終了後のアンケートより
質問１　（大変良かった・良かった）　合わせて１００％
質問２　それはなぜか（内容が期待通り・今後に役に立つ・内容が分かり易い・全体の雰囲気が良い）の順で否定的な意見はなかった。
その他の感想
リモートで心が通じる話が聴けた・リモートに期待していなかったがよく聴き取れ心に迫った・生々しい力のある講演で涙が止まらなかった・問い続けることが大切だと思った・言葉の力と輝きを講演・朗読詩に感じた・震災との繋がりを通して福島の事情を直接聴きたい・震災という現実を前にして体感意識を素直に表現する難しさを思った・感染予防がしっかり取られていてよく運営されていた・良い講演の企画をして下さり感謝　・など貴重なご意見ご感想ありがとうございました。

（報告　山本眞弓）

■講演『ＱＱＱ～震災十年へ、絶対的質問をめぐって』

報告　相野優子

午後一時三十分時里二郎会長の開会で挨拶始まり、皆さまの協力と県や芸術文化協会の支援に感謝の言葉が述べられた。第一部は司会の大橋氏より講師紹介があり、和合亮一氏の講演がリモートで行われた。和合氏は「生まれて初めてのリモート講演」と副題の付いた自作テキストに従い、ご子息の部屋より、穏やかな口調で、演題「ＱＱＱ～震災十年へ、絶対的質問をめぐって～」について話を始められた。はじめに「マスクなので皆さんの顔が見えにくいので手を振ったりしてください」と場を和ませ、最初のテキストとして、気仙沼の支援所に暮らしていた震災当時小学五年生の菊田守くんの「ありがとう」という詩を朗読で紹介された。氏は阪神淡路大震災の時は教師になって一年目で、子供たちに記事を見せて話し合ったとのことで、阪神淡路大震災の被災地である兵庫にもエールを送られた。それから二つ目のテキストとして、実際に震災を体験し考えたことを「天」「地」「人」とに分けて話された。「天」とは、死者と共に有るということで、和合氏の教え子も含め、いまだ多くの行方不明者がいる震災十年を名付けたもの。「地」とは、宇宙の闇に対峙する表現として、あらためて大地の上に暮らしている気持ちを実感されたこと。「人」とは、震災後親しくしていた以前の友人と気持ちが通じ合わなくなったことや人間の在り様の変化についてなど。三つ目のテキストは「現代詩の問題」で、二〇一一年三月一六日に書かれたご自身の詩『詩の礎』を朗読された。渾身の朗読で会場はしんと静まった。また、東日本大震災の時の当日の様子、当時の避難所の様子、原発のこと、三月一六日からツイートをはじめたこと、「あなたが書いている詩は役に立たない」などのお叱りのメールが毎晩来て悩んだこと。一か月、月、二か月たって詩に曲をつけて作曲されことばが歌になってユーチ

ューブにのせてもらい、何かが変わってきたことなども述べられた。被災地からの三月一六日からのツイートは機会詩（オケージョナリーポエム）と分類され、正の機動力不足と負の旺盛な機動力として問題提起されていた。さらにテキスト４としての詩集『ＱＱＱ』の朗読。「終わらない問い」と題されたテキスト５では自身の詩「詩の黙礼」を朗読され、南三陸の役場で、最後まで避難を呼びかけた遠藤美紀さんの声も聞かせていただいた。また、津波が迫る防災庁舎の屋上にて肩と手を組んでいた人々の力を書きたいと、それを書かなければ人々の真のつながりはないと、今何を書くべきかを是非皆さんと語り合いたいと述べられた。震災から十年ではなく「震災十年」へと、ここからが正念場であり、神戸の方々にもぜひ福島に来ていただきたいと呼びかけられた。阿武隈川、安達太良山のある智恵子抄の福島に来ていただいて交流したいと。会うことが必要であり受け止める人が居れば表現者がふえていく。あらゆる表現方法と向き合いオケージョナリーポエムであろうと現代詩であろうと、インターネット、写真とのコラボ、合唱と多岐にわたる発信法でしなやかに表現と向き合うことが必要な時代であり、やり方は様々にあるのではないかとの考えを述べられ、同じ震災の被災地である兵庫に力強いメッセージを送って、講演を終えられた。

第 10 回　Poem ＆ Art Collection

２０２１年1月１４日（木）１０時～１９日（火）１５時
期間中　平日　１０時～１７時　　土・日　９時　～　１７時
会場　神戸文学館　657-0838　神戸市灘区王子町３－１－２　　TEL＆fax　078-882-2028
主催　兵庫県現代詩協会　神戸文学館、共催　日本現代詩人会　半どんの会

☆**ポエム＆アートコレクション**　会員による詩・アート作品　（絵画、書、オブジェなどの展示）
◇搬入及び展示作業　1月１２日（火）１３時から１３時半　（宅急便による搬入は要相談）
　１３時半より作品展示作業開始１５時完了
◇搬出　1月１９日（火）１５時（時間厳守）から１５時半。上記の時間内に各自作品をお引き取りください。
（宅急便による搬出は要相談。会期中及び搬出時間前の作品の引き取りは不可）
◇参加費　１点￥500（2 点まで可）搬入時に納入
◇出品作品は額装・パネル・表具など大小を問わず１点として計上します。作品に添えられる詩は A4 サイズくらいの大きさでまとめてください。過去に当会の詩画展に出された作品の再出品は不可

☆**兵庫・詩の現在展**（会員の詩集、詩誌展示）　本年度も多くの優れた詩集、詩誌を展示します。

☆**特別イベント　講演会**
◇２０２１年1月１６日（土）１４時～１５時半　演者：**時里二郎**
◇講演要旨：前回に引き続いて、演題「詩を書くということ　第二回」。コロナ禍と詩のこと、あるいは未曽有な災厄と詩のことにふれながら、「詩と言葉と身体」というテーマに言及する。資料としては神戸新聞の投稿欄の作品や活躍中の詩人の作品などを取り上げる。
◇**講演会に参加希望の方は神戸文学館に事前に直接申し込んで下さい。**　（担当：北岡武司、神尾和寿）

■第１８回読書会

『和合亮一』の詩について　チューター大西隆志

報告　野口幸雄

詩のフェスタに向けて、講師・和合亮一氏の詩についての読書会を７月２５日（土）１３時～１５時　神戸市教育会館２０３号室で開催。参加者１８名

二〇二〇年ふれあいの祭典詩のフェスタひょうごに和合亮一氏をお迎えするにあたり事前に学習をしておくことを目的に大西隆志氏にチューターをお願いしました。大西さんは当日すばらしいレジメを用意され十分準備をされたことが伺えます。レジメに沿って当日の模様を書いてみましょう。まず和合氏の「文学との出会い」からプロフィールの紹介。「一九六八年福島県福島市生まれ（五十二歳）学生時代にシューレアリズムの詩を書いて駅前で配布したりしておられました。第一詩集「ＡＦＴＥＲ」（一九九八年）で中原中也賞受賞、「地球頭脳詩編」で晩翠賞受賞など才能を発揮されていきます。二〇一一年東日本大震災では自らも被災、原子力発電所事故に見舞われ、ツイッターにて「詩の礫」と題した連作を発表し続ける」等十分すぎる情報を提供されました。レジメをこれだけ綿密に書かれるのは大変だったろうと思いますが、努力に脱帽です。そして「行動する詩人」としての活動の説明へ。震災後の福島の文化を発信するプロジェクト唱曲の作詞、国内外の詩祭への出演など幅広い活躍。また子供たちに詩を教える「詩の寺子屋」の紹介も。

いよいよ和合氏の講演の演題「ＱＱＱ～震災十年へ、絶対的質問をめぐって～」に入りました。資料から「詩の礫」を朗読。放射能がふっています。静かな夜です。明けない夜は無い。の有名なフレーズが読まれ、会場はシーンとしました。大西さんの朗読のうまさが光りました。（普段の知ってる大西さんと違うみたい）「詩の邂逅」から「決意」「三号機　爆発　それから」「短い暮らし」で震災後の福島が紹介されます。このような詩を選んだ大西さんの知性が光ります（普段の大西さんと違うみたい）そして「昨日ヨリモ優シクナリタイ」から「ノート」「白紙」表題氏の「昨日よりも優しくなりたい」が読まれました。最後に「ＱＱＱ」へ。大西さんの話で本物の和合さんの話を聞きたいと思わせたのは大成功でした。（普段の大西さんとは違う人みたい。）

さてここで普段の大西さんらしい出来事を一つ紹介しておきましょう。当日アクシデントがあって大西さん開演に三十分遅れたのです。しかし、担当の丸田礼子理事は少しもあわてず機転の利いた対応で参加者を退屈させることなく運営を行い大西さんの到着を待ったのです。

（担当　丸田礼子）

■第１９回読書会

『石牟礼道子の作品について』チューター：丸田礼子

１１月２８日（土）１３時　神戸市教育会館４０４号室

■アンソロジー『ひょうご現代詩集』（第１６集）募集

同詩集は隔年で編集・発行されるもので、２０２０年度は発行年にあたります。会員のみなさんの作品を掲載・公開する兵庫県現代詩協会の大切な出版事業のひとつです。締切は既に終わっていますので、未提出の会員は至急送稿して下さい。

資格：兵庫県現代詩協会員、作品：詩一篇（未既発表不問、割付内で複数篇可）、割付：一段組／３５文字×３７行、二段組：２２文字×７４行、参加費：ハガキにてお知らせします。３０００円。

詩稿送付先：〒650-0012 神戸市中央区北長狭通１-７-１ カルメンビル２Ｆ Tel&FAX 078-331-2228 E-mail maroad_kobe@yahoo.co.jp （担当　大橋愛由等）

第７回　2020 年度文学紀行

新型**《第７回文学紀行姫路文学館・姫路城周辺をぶらり歩き》***コロナウイルス感染症の冬期感染拡大で中止選択もあり*

２０２１年３月１４日（日）雨天決行　集合　　JR 姫路駅中央改札口　１０時

「おもてなしダイニング福亭」にて昼食　　参加費：2,500 円（昼食代・観覧料含む）※途中のバス代は個人負担

《姫路城周辺と姫路文学館「没後６０年記念　歌人岸上大作展」を巡る》

◎姫路文学館「没後６０年記念　歌人岸上大作展」会期１２月１５日（土）～３月２１日（日）

・文学館入館料（岸上大作展含む３１０円）

◎ナビゲーター・未定、文学館では学芸員解説予定だが、当日岸上大作原作舞台イベントあり。

※行程　10:00ＪＲ姫路駅中央改札口集合⇒姫路駅北口神姫バス停⇒市之橋文学館前下車⇒姫路文学館《姫路文学館・歌人岸上大作展は、60 年安保闘争に日本中が揺れた年の終わりに、21 歳の若さで自らの命を絶った歌人岸上大作。夭折の歌人として、そして昭和の青春のひとつの象徴として、読み継がれ、語り継がれました。岸上が世を去ってから 60 年に、彼が生きた証しを一堂に展観することで、命を賭けて短歌史、文学史に刻んだ足跡を探ります。》⇒11:40 姫路文学館出発⇒阿部知二文学碑等（徒歩）⇒12:00 兵庫県立歴史博物館《県立歴史博物館「絵そらごとの楽しみ－江戸時代の絵画から－展」では、江戸時代の絵画の虚と実の入り混じった、絵画における美の諸相が楽しめます。》 ⇒13:00 バス又は徒歩で福亭へ（昼食）⇒13:30 福亭

＊申込は同封葉書でお願いします。締切 2 月 28 日（日）　　（担当・大西隆志）

■寄稿

活弁士の詩文

季村敏夫

詩村映二（本名織田重兵衛、一九〇〇～六〇）、シンプルな数式のような時間の帯である。一九〇〇年はニーチェ狂死、六〇年は安保闘争、日本社会党委員長の浅沼稲次郎刺殺の年である。

尋常小学校も終えずに丁稚奉公、大阪に出たのか、詩村映二の幼少期はまったくわからない。大正末から昭和初年、活動写真弁士（説明者）だったことは確かで、二十数年間、姐さんたちの喝采を浴びたが、トーキー反対争議に加担、闘争の敗北後に詩作に転じ、第三次『神戸詩人』（光本兼一編集）、第四次『神戸詩人』（小林武雄編集）などに寄稿、姫路で『驢馬』を編集した。作品の傾向は多岐に渡り、ニーチェやハイネ、ゲーテや保田與重郎らが関心を寄せたセント・ヘレナ流刑のナポレオンをよく題材にした。彼の遺したモダニズム詩四五篇と、映画、美術、文学、探偵推理小説などの評をまとめ、この六月に『カツベン　詩村映二詩文』（みずのわ出版）を上梓した。

映画に詩的行為、さらに江戸川乱歩、長谷川利行、台南の風車詩社の楊熾昌（筆名、水蔭萍）、アナキスト結社黒闘社の一員だった田代健などとの交友、台湾に赴いた形跡はないが、追いすがる恋人をふりきって外地満州を放浪するなど八面六臂だったが、徹頭徹尾巷の人、インテリから遠い説明者として、肉声で世界に対峙することは芸術だとうそぶいた。

うそぶいたといえば、敗戦後は憔悴したドブネズミの単独性を生きた。死屍累々の焦土に山彦書房という墓碑を掲げ、戸板にゾッキ本を並べ、占領軍に混じる復員兵に声を放った。戸板にゾッキ本とは、市井の塵労に沈む自らを曝す意志であり、流謫である。一篇の戦争詩を書くことなく、昂然と権力に抗い、非国民を引き受けた情熱は焼尽していたが、ドブネズミとして生きる姿は、いち早く戦後民主主義に乗じ、「詩人集団」を名のって再結集、再出発を果たした神戸詩人事件の当事者たちと袂を分かつ独自なものであったといってよい。

活動写真弁士、なんと苛烈な人生か。妻ある身ながら懇ろになったカフェーの女給と服毒自殺、不貞の妻を日本刀で斬殺、巣鴨プリズンに収容、或いは一家心中未遂、されど説明は芸術、「散る！飛ぶ！砕ける！君に、この悲壮な覚悟があるか」と声を放つ。

詩村映二はどうであったか。湊川新開地、三宮神社境内、難波新地千日前（かつての刑場、火葬場）、姫路と転々とした。新開地での活動が長かったようだが、そこは「悪所」であり、戦前神戸の有数の繁華街、明治三四（一九〇一）年、大雨の度に荒れ狂う湊川の埋め立て工事の跡に造られ、活動写真や芝居小屋、百貨店などが林立、その日稼ぎの香具師、フラテン（ちんぴら）、掏摸（チボ）、博奕打ち、アナキストらが行きかう人びとに混じっていた。そのありさまは川端康成の『浅草紅団』に通じる喧噪、暴力、快楽の渦であった。阪神大震災以後の現在、大通りを一歩内へ入ると、復興からとり残された歯抜けの更地があり、同時に、福原遊郭跡にはまさに皮膚と皮膚の接触ゾーンのソープランドやピンクサロンが密集。ソーシャルディスタンス、他者の唇への接近を禁じられるなか歓楽街を歩いたが、欲動の物音が消失した静寂は骨身にこたえた。

早春のある日、松竹座（湊川公園から南へ本通りを下る東側に跡地がある）の次席活動弁士だった小島昌一郎（本名善平、一九〇三～五七）の長女の小島のぶ江さん（昭和二年生まれ）を訪ねた。活弁士のポートレート、トーキー反対争議の写真などがおさめられたアルバムをお借りするためである。

昭和二〇（一九四五）年六月一日、父四二歳で応招、五日（野坂昭如の『火垂るの墓』も同日）の神戸空襲の後、父のアルバムから写真を引き剥がしてリュックにつめ、母とともに福岡へ疎開、二十日福岡空襲で疎開先焼失、熊本へ、そこで玉音放送を聞く。炎上を回避した奇跡的なドキュメントである。風呂敷に包まれた二冊のアルバム、そこに、無差別殺戮という受難が塗りこめられている。疎開も復員も降伏も知らないわたしには重い荷物、胸に抱えながら宝塚の坂を下った。

生きのびろ、のぶ江さんの疎開先だった熊本から激励の帯文（伊藤比呂美）が届いた。活弁士の伝える眼の漲りをみよ、と。その後熊本は線状降水帯に覆われ、連日の豪雨、洪水、後先わからず蹂躙された。災厄から立ち上がり、再び歩む、重力に逆らいながら、坂道（下り坂）を這い上がる、生きて在るとはその繰り返しだという考えを反芻する。

■会員の詩集評

時里二郎

◎『朗読詩集　かなしみ祭り』玉川侑香　CD

玉川さんの朗読 CD である。阪神淡路大震災から二五年。しおりには、「朗読を始めたのは、その震災を伝えたいという思いからだった。瓦礫の中から立ち上がる人々、やさしさや悲しさややりきれなさを抱えながら「日常」へと帰っていく姿を追ってきた。」とある。これまで「風のたより」という朗読と音楽のジョイントを結成し、震災を語り継ぐ活動も続けてこられた。震災から二五年という節目に、これまでの玉川さんの絵本や詩集から代表作とでもいうべき作品十五編を選んで CD に収めてある。はじめの「ミヨちゃん」から、いっぺんに引き込まれた。震災で言葉を失ったミヨちゃんが言葉を恢復するまでを、実に丁寧に細部を描き込んである。何よりも作品の組み

立てがよく考えられている。地震でおとうさんと子犬のポチが家の下敷きになって死んだ。それからミヨちゃんは言葉を失った。日本海のそばのおばあちゃんの家に住んで、そこでの生活。民宿で働くお母さん、弟の世話。寄り添うような詩の眼差し。「おかあさん　神戸へ帰ろう」。言葉を失ったミヨちゃんが言葉を回復するシーンには心うたれる。神戸の被災地の人々の日常によりそいながら、言葉は簡潔で無駄がない。その余白（間）の豊かな表現の奥行も印象に残った。他にも、哀感とユーモアにあふれた市井の人々の人なつこさとつながりの温かさを描いた諸編が収録されている。

朗読もすばらしい。言葉が吹き込む息づかいによって、作品が生きているように生き生きと聞こえる。しみじみとした感動。あくまでも前を向いて生きて行こうとする人々の言葉が印象的。こちらが勇気づけられる。

◎『吹き抜けた時』辻岡真紀子（澪標）。

二〇二〇年六月刊。辻岡さんは一昨年の神戸新聞文芸欄の詩の部門で年間賞を受賞なさっている。その受賞作がタイトルポエムの「吹き抜けた時」。押し入れの奥にしまい込まれた鯉のぼりを巡って紡がれた女性の「物語」。詩の眼差しは、飛び立っていった鯉のぼりの家族よりも、カラカラとむなしく回る風車のほうに引き寄せられている。もちろん、それはひとり残された自分の心の暗喩。第三連に子どもの頃の自分をそれとなく差し挟んで、今の自分を映し出すという心憎い組み立て。それによって、彼女の「物語」の時間が生まれている。淡いかなしみをたたえた抒情が湿っぽくならずに、陰影深い余韻をたたえているのは、作者のさわやかな筆致によるところが大きい。もう一つ、「吹き抜けた時」というタイトルも絶妙。とまどいとあきらめとかなしみをふくんだ彼女の心を吹き抜けたその風が、詩の言葉となって、彼女を新しい物語へと誘っているかのようだ。目をみはるような新鮮な詩の風を感じる。なおこの詩集は本年度の富田砕花賞の候補作にもなった。

◎季村敏夫編『カツベン　詩村映二詩文』（みずのわ出版）。

二〇二〇年六月刊。　二〇〇九年の『山上の蜘蛛―神戸モダニズムと海港都市ノート』（みずのわ出版）から続いている季村敏夫の神戸モダニズムの渉猟は十年を越えている。こんどの『カツベン―詩村映二詩文』（みずのわ出版）もまたその成果であることは言うまでもない。この編詩文集は、この前の『一九三〇年代モダニズム詩集―矢向季子・隼橋登美子・冬澤弦』とほぼ同時代の詩村映二（一九〇〇～一九六〇）の詩と散文を集め、熱のこもった季村の解題と、時代と文化の空気を色濃く伝える活弁士関連の写真と克明な資料が全ページの半分ほどを占める。

詩という営為を、言語作品の背後にまで抱え込んでとらえようとする独特の季村スタイルとでも言うべき方法論。つまりは、詩村にかぎらず、彼が浮かびあがらせようとする三十年代のモダニズム詩人たちは、残された作品の数も限られ、雑誌などの媒体でしか詩を残していない。残された作品はあまりにも数少ない。彼らの言葉を、彼らの生の片鱗をたどりながら、それらを彼らの生きた都市（神戸や姫路などの場所）、時代（戦時下のカタストロフ前夜）や文化史的な視座などのなかに映してみようとする。そして、何よりも、近現代の詩史的な営みから投げられる季村の「補助線」によって、彼らの詩を、同時代的なモダニズムの運動の中で浮かび上がらせようとする。権力との関わりやそれと向き合う姿勢（神戸詩人事件など）、日本の近代史との共時的な響き合いを、神戸という海港都市の文学運動のなかに聞き取っていく。

資料を探索し、関わりのあった人を尋ねて、これほどまでに季村さんが無名の詩人の生きざまと、その魂を救いだそうとするのか。まるでなにものかに取り憑かれたようにさえみえる。この神戸モダニズムに対するアプローチの仕方を遡ると、阪神淡路大震災の後に書かれた『日々の、すみか』（書肆山田）のスタイルに行き当たる。さらに、遡れば、季村が呼び覚ました詩人たちの姿が、七十年安保前後の彼自身に繋がっていくような気がしてならない。「消えてしまった、たましいをよびよせる」と『一九三〇年代モダニズム詩集』のはじめに書き付けている。そこに、自らの七〇年代前後の季村自身の魂の遠い木霊が響いているような気がする。

はじめに記した『山上の蜘蛛―神戸モダニズムと海港都市ノート』を読むまでは、神戸モダニズムは竹中郁という緑一色の芝生に見えていた。季村はその芝生を剥がして、その下に身を潜めていた、生き生きと生のまばゆい光を発する多くの無名の詩人たちをよみがえらせた。（そのことによって竹中郁もまた、決して緑の芝生一色というような単純な位相で処理できる詩人でなかったことがみえてくるのだが。）

もちろん、神戸モダニズムの検証は、季村が始めたことではない。昭和三五年に創刊された同人誌『蜘蛛』の詩人たちの営為、とりわけ君本昌久さんの検証作業があった。季村さんはそれを引き継いで、それこそたったひとりで、ここまでやってこられた。

◎句集『止まり木』増田まさみ（私家版）。

二〇二〇年六月刊。第六句集。増田さんは俳句の所属誌を持たない。小さな虫や小動物や植物にひそむ死や生のなまなましい息遣いを掬い取りながら、それを人間の生と死の実相に誘い込む。その手際が、時に凄みのある句を探り当てている。人間の湿った闇にかよう体温のぬるみを感じる句にひかれる。時にシュールなイメージにはっとさせられたり、思わず口ずさんで心地よいリズムにひかれたり、俳句に疎い選者にもスリルのある時間にひたることができた。以下、心にとまった句を引いてみる。

辣韮（らっきょう）やつるんと抜ける魂魄も

一疋の列もあるらん夜半の蟻

ふところに蝉穴深き子守歌
落蝉やまだ生ぬるき虚空あり
人肌の木霊は霧へ吸われたり
秋霖やちくわに怖き穴があり
懊悩にこつんと中る海鼠かな
芥子粒のように母逝く春の山
春昼に産みつけられし老婆かな
貼紙のあるぬけみちや若冲忌

■理事会報告

◆六月七日第一回常任理事会及び第三十九回理事会。県民会館にて。十二名出席。これまで私学会館を利用してきたが、閉館のため以降は県民会館を利用する。また、新型コロナウィルス緊急事態宣言で外出自粛要請のため、総会は中止となり、書面で総会決議事項を問う異例の措置となったが、一〇六名の承認を経て総会成立とした。また常任理事会も遅れての開催となった。＊二〇二〇年度事業計画について各部門より。**会報発行**（和比古）年二回。会員情報も盛り込む。**読書会**（丸田礼子）七月二十五日（土）十三時より、神戸市教育会館にて「和合亮一の詩について」チューター・大西隆志。参加申込は葉書にて七月二十日までに。コロナ感染予防のため先着二十五名まで。**ホームページ**（北野和博）コロナのためイベントは中止となり更新はなし。**「ポエム&アートコレクション展」**（神尾和寿・北岡武司）案内状及び参加申込葉書を作成。会期は二〇二一年一月十四日(木)～十九日（火）を予定。申込は九月末までに。**アンソロジー**（大橋愛由等）『ひょうご現代詩集２０２０』参加申込締切は十月十六日。参加費三千円、一人一冊。印刷は游文舎に依頼。**文学紀行**（大西隆志）昨年中止になった姫路文学散歩を二〇二一年三月に実施予定。**役員選挙**(事務局)選挙管理委員会を三役と一般会員からなる四名で構成する。**「ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご」**（山本眞弓）十月三日（土）ラッセホールにて。講演講師は和合亮一氏。コロナ感染予防のため、入場制限とマスク・検温・消毒などを徹底する。

◆七月十二日第二回常任理事会。県民会館にて。出席者十名。**入退会・名簿**(神田)退会者一名。現在一三二名。**会計報告**(玉川)顧問の年会費は免除。協力金としては可とする。**読書会**（丸田）第十八回読書会、七月二十五日（土）十三時より、神戸市教育会館にて「和合亮一の詩について」チューター・大西隆志。参加申し込み締切は七月二十日(月)定員三十五名。**「詩のフェスタひょうご」**(山本)コロナ対策費のため収支予算書の見直し。チラシに当日の各自マスク着用の呼びかけと、受付での体温測定・アルコール消毒について明記。中止の場合のため、参加申込者の氏名・住所などを確認しておく。アクリル板、フェイスシールド、体温計などを用意しておく。**「ポエム&アートコレクション展」**（神尾・北岡）チラシは十二月発行の会報に同封。申込締切は九月三十日。**役員選挙**(事務局)被選挙人名簿は次回会報に同封。投票締切は二〇二一年一月九日(土)、開票は一月二十五日(月)選挙管理委員は役員を含め四名。

◆九月六日(土)第三回常任理事会。県民会館にて。出席者十二名。**入退会**(神田)退会者一名。現在一三三名。**会計**(玉川)コロナのため動きはなし。**会報**（和比古）原稿は十月末締切。会員の作品などスペースがあれば掲載したい。**読書会**(丸田)第十八回「和合亮一の詩について」チューター・大西隆志、報告・野口幸雄。参加者十八名。第十九回「石牟礼道子の詩」チューター・丸太礼子。**「ポエム&アートコレクション展」**（北岡・神尾）文学館入り口にチラシ大のポスターを用意。記録写真は作品納入時に下に置いた状態で撮影する。一月十六日（土）の講演は時里二郎氏。**「アンソロジー」**(大橋)作品参加案内は葉書にて送付。作者校正原稿と共に参加費三千円の振込用紙を同封する。最終校正は永井ますみ氏に協力依頼。編集後記は大橋が担当。完成予定は二月上旬頃。**文学紀行**（大西）二〇二一年三月十四日(土)を予定。書写山はロープウェイの都合で取りやめ、文学館『岸上大作展』と県立歴史博物館『絵空事の楽しみ』を予定。**ホームページ**（北野）「詩のフェスタひょうご」を写真入りで掲載予定。**役員選挙**(山本)選挙人名簿・投票用紙を切手添付の封筒と共に会員に送付する。理事・常任理事の人数については次回に検討。

◆十月三十一日（土）第四回常任理事会。県民会館にて。出席者十名。**入退会**(神田)入退会者なし。現在一三二名。**会報**（和比古）48号は十二月一日発行。**読書会**(丸田)第十九回「石牟礼道子の作品について」チューター・丸田礼子。十一月初めに案内往復はがき発送。**ポエム&アートコレクション展**（神尾・北岡）チラシの検討。講演「詩を書くということ」講師・時里二郎。**アンソロジー**（大橋）十一月中旬に原稿の再催促。構成及び参加費の振込用紙は十二月初めに発送。３００部印刷、遊文舎。発刊は二月中旬予定。定価三千円。会員は二千円。**役員選挙**(山本・神田)投票用紙発送は十二月一日。投票締切は一月二十日(水)。一月二十五日(月)県民会館にて役員を含む四名で開票。**文学散歩**（大西）コロナウィルス感染拡大が懸念されるが実施の方向で検討。三月十四日(日)姫路文学館他。申込締切は二月末。

（文責・尾崎美紀）

■詩のフェスタひょうご朗読詩集より

（４８・４９号で会員の詩を掲載）

びんずるさん　小田涼子

鮮やかな新緑に　境内の池一面の
かきつばたの青が映える
階段を上ると拝殿の横に
どっかと座る　びんつるさん
びんつるさんの体で　自分の悪いところをなでると
治してくれると言い伝えられる　なで仏さん
ピカピカに光り輝く両の膝は

膝の悩みを持つ多くの人の手が
救いを求めてすがった証か
私も　この膝の痛みがとれますようにと
びんつるさんの左右の膝を擦る

びんつるさんは
昔からどれだけ多くの人の
病の苦しみ　痛みを背負ってきたことか
びんづるさんの体は
人々の願いや祈りの手に磨かれてきた
コロナウィルスに人々が怯える今
江戸時代に描かれた　疫病を鎮めてくれるという
妖怪アマビエがもてはやされる
得たいの知れぬ不安や恐怖を鎮めるには
偶像に救いを求めるより仕方がないのだろうか
私も　肺を病む夫の回復を願い
がん封じのお守りを握りしめているではないか

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

TOKIO ララバイ　　福田知子

TOKIO に捧げる　TOKIO ララバイ
ララバイってさよならじゃない
ララバイは子守唄

バイバイ　売買の倍々ゲーム
バイバイ　夜の街の狩人の狩人たち
バイバイ　選挙に踊らされたひとびと

何もしない TOKIO ラビリンス
何も告げない TOKIO アラート
コロナにころんだ TOKIO コロリン
オリンピックは TOKIO にオランダ
リニアみたくまっすぐだと TOKIO 折れるわ
バイバイ　アラート
バイバイ　コロナ
バイバイ　オリンピック
バイバイ　リニア
バイバイ　ゆるりんこ&アベノンマスク

だから歌うよ　ララバイ　ララバイ
少年よ　荒野に　街に　キミたちのいのち　へめぐる
赤い月　赤いアラート　真っ赤なムジナ　むなしいね
オトナ少女のコロナ禍は　ソレ！　甘いお菓子の誘惑だ

まけるな　ララビ　ワラビたち
コロコロコロナ　コロンダ　ダンス
ふふふ　ふ　を　とって　ふとって　いいゾ
まけるな　ワラビ　ワラワラ　わらって
われらのラビリンス
まけるなワラビ　わらわらわらって
一銭だってまけたらあかん！
ララバイ　ララバイ
TOKIO ララバイ

令和の子守は唄ってばかりじゃいられない
背中のコドモが泣いている
黙って大声で泣いている

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日　　野口幸雄

その日　神戸市立長田工業高校　被災された住民が押し寄せたので校長先生が開門されました　避難所には指定されていません　災害対策本部は知りませんでした　一日過ぎ二日経ち　住民に不安や不満が募っていきました

「みなさーん　大変ご不便をおかけいたしました　もう大丈夫です　ご要望を何でも言ってください」ハンドマイクはどなるように学校中を駈けずり回りました

水が　毛布が　懐中電灯　子供のオムツが欲しい要望がどんどん出されました　事務長さんと災害対策本部に実情報告　物品を受け取り急いで引き返し　その日から学校に泊まり込むことになりました

トイレが流せない（これには困りました）この学校には長年使われていない井戸があり先生方が水を汲み上げれるようにしてくれました　マンホールを開けて簡易水洗トイレも作ってくれました　さすが工業高校です

私はたった二～三日寝ていないだけで頭も身体も動きません　一度自宅に返してもらえる事になりました　自転車での帰り道支援物質を積んだ車とすれ違います　気持ちがたかぶっているのか涙が出てきてとまらない

爆睡しました　何時間寝ていたか解りません
学校に戻り　体育館や教室の場所ごとに世話役を募り自治組織を作りました　これで支援物資の運搬　配布がスムーズに出来るようになり　やっと普通の避難所になりました

テレビが体育館での成人式を放映しています
「あっ　地震！」咄嗟に身体が固くなります
妻がマッサージチェアーを使っている揺れでした　あの日から二十五年も経っているというのに

■他団体会報・詩書　（2020年6～10月）

すずかけ　6・7・8・9・10・11月号（兵庫県芸術文化協会）
宮城県詩人会会報第31号（8竹内英典）
兵庫県歌人クラブ会報第203号　（安藤直彦）
福井県詩人懇話会会報103号（渡辺本爾）
長野県詩人協会会報No・144・145（和田攻）
中日詩人会会報No・198・199（古賀大助）
埼玉詩人会会報第93号・号外（北畑光男）
いしかわ詩人会会報49号（米村晋）
関西詩人協会会報第98号・99号（佐子真由美）
いちご通信（大分県詩人連盟会報）第27号（河野）
岡山県詩人協会だよりNo・29・30（斎藤恵子）
群馬詩人クラブ会報No・314（佐伯圭）
茨城健詩人協会会報No・30（硲杏子）
岐阜県詩人会会報第15号（天木三枝子）
秋田県現代詩人協会会報第62号（横山仁）
千葉県詩人クラブ会報No・250・251（根本明）
福島県現代詩人会会報第123号（齋藤貢）
詩界通信91号・92号（北岡淳子）
日本現代詩人会報No・159・160（山田隆昭）
宮崎県詩の会会報46号（谷元益男）
詩のひろば第11号（関西詩人協会　名古きよえ）
紙上詩画展第30回25周年記念（関西詩人協会）
モデラート50（岡崎葉）
交野が原88（金堀則夫）
弦78（渡辺宗子）
フラジャイル第9号（柴田望）
詩が開く未来　日本詩人クラブ70周年記念冊子
中四国詩集・2020（中四国詩人会　川辺真）
日本現代詩人会創立70周年記念事業プレイベント
ふくい県詩祭ｉｎ三国記録詩集ふくい2020・36集
（福井県詩人懇話会）
青森県詩人連盟会報49号（藤田晴央）
青森県詩集・青森2020（藤田晴央）
『愛を待つ』岡崎葉（ウイング出版）
中四国詩人会　ニューズレター（中四国詩人会）
2020年間詩集（徳島現代詩協会）

■会員の発行書　（2020年6～10月）

『カツベン　詩村映二詩文』季村敏夫編（みずのわ出版）
「止まり木」増田まさみ句集（霧工房）
『朗読詩集　かなしみの祭り』CD玉川侑香
『吹き抜けた時』辻岡真紀子（澪標）
『倉橋健一の詩を繙く　私の読書ノートから』
　牧田榮子（澪標）
全国川柳作家年鑑第65回（ふあうすと川柳社）

■会員の詩誌・個人誌（2020年6～10月）

表情　西宮文芸誌第29号（西宮文芸協会）
RIVIERE171・172（永井ますみ）
現代詩神戸269・270（三宅武）
別嬢112（高橋夏男）
鶺鴒14（江口節）
時刻表第8号（たかとう匡子）
あむの木通信136・137・138（福永祥子）
遥　2号（和比古）
EDGING46・47（寺田操
Contralto　No・42（坂東里美）
いちばぎゃらりい侑香7月（玉川侑香）
プラタナス66号（玉川侑香）

■会員の動静

◇時里二郎　兵庫県文化賞受賞

多彩でしなやかなことばと精巧な文体で独自の世界を構築。平成31年に詩集『名井島』で高見順賞・読売文学賞を受賞している。贈呈式　十一月十日（於）兵庫県公館

◇「足立巻一と戦後大阪」現代詩セミナーｉｎ神戸

報告者／たかとう匡子・季村敏夫
2020年11月7日(土)神戸女子大学教育センター

■退会

植村 孝、谷部良一

■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。
入会申込　神田さよ　TEL　0798-53-0686

■会計より

今年度の会費は会員皆様のご協力により円滑に納入されています。有難うございます。未納の方は恐れ入りますが、納入方よろしくお願い致します。年会費は四千円です。
振替口座　00920・9・111243
口座名　兵庫県現代詩協会　（担当：玉川侑香）

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局へお送り下さい。詩に関するイベント情報の案内、会員の動静もお知らせください。連絡先　山本眞弓。
＊ホームページ
http://hyogopoetstry.sakura.ne.jp/main/の充実を図るためにエッセイ・評論の投稿も歓迎です。連絡先：北野和博　soranohito.jp@yahoo.co.jp

■担当

兵庫県現代詩協会事務局《山本眞弓》
〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-203
TEL　078-241-3086
会計《玉川侑香》TEL　078-361-1334
会報編集《和比古》TEL　0798-72-9308
印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31　TEL　06-6304-9325